九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

初期紅毛流外科と儒医向井元升について

ミヒェル, ヴォルフガング
九州大学：名誉教授

https://hdl.handle.net/2324/18371

出版情報：日本医史学雑誌. 56 (3), pp.367-385, 2010-09. 日本医史学会
バージョン：
権利関係：

日本医史学雑誌　第 56 巻第 3 号（2010）　367–385

初期紅毛流外科と儒医向井元升について

ヴォルフガング・ミヒェル

福岡市

受付：平成 21 年 10 月 19 日／受理：平成 22 年 7 月 27 日

要旨：明暦 2 年，儒医向井元升は大目付井上筑後守政重の依頼で阿蘭陀通詞を介して出島蘭館医「アンスヨレアン」と接触し，西洋外科術に関する報告をまとめたが，それ以外に翌年 11 月に後任の医師「スティビン」から数週間にわたり受けた教授に基づいて誕生した書物もあり，後世に伝わった写本は様々である．その代表的な資料とされた「紅毛流外科秘要」は，実は後に作成された「混合物」であり，むしろ「阿蘭陀伝外科類方」，「阿蘭陀外科医方」，「證治指南」の方が当時の内容をより正確に反映している．「證治指南」は，寛文元年に刊行された『阿蘭陀外科良方』により早くから広まっていたが，この写本を用いた伝習は 19 世紀まで続いた．向井元升は西洋医術に関する情報をほぼそのままで取り入れながらも，病理学に関する出島商館医の説明を中国系の教義をもとに解釈し，同化させた．これは医師による初の紅毛流外科関連の書であるとともに，西洋医学の「折衷的受容」の典型と言える．

キーワード：向井元升，「アンスヨレアン」，「スティビン」，紅毛流外科，折衷的受容，
紅毛流外科秘要，證治指南，阿蘭陀伝外科類方

はじめに

江戸初期の著名な儒医向井元升（1609–1677）が阿蘭陀通詞を介して出島蘭館医「アンスヨレアン」と接触し「紅毛流外科秘要」を著したという説はとりわけ古賀十二郎の著作により広く普及しているが，当該写本の内容も所在も不明だったためかその信憑性は一度も検証されてこなかった．筆者は，九州大学医学図書館蔵の写本「阿蘭陀伝外科類方」を調査する際にこの問題に気づき，向井元升の活動及びその実績に関する史料を集めながら，その解明を進めてきた[1)]．本論文は，オランダ東インド会社の史料と和文の写本史料に基づき，向井元升と出島商館の外科医との交流及びその成果を総括的に論じるものである．商館医カスパル・シャムベルゲル（Caspar Schamberger[2)]）が慶安 3（1650）年に蒔いた「紅毛流外科の種」が芽吹く時期に，日本人医師と西洋人外科医が初めて長期にわたり病や創傷について情報を伝え合った．向井元升がまとめた報告からは，いくつかの難題及びその後の西洋医学受容を支配する折衷的なアプローチを窺うことができる．

1　先行研究

『西洋医術伝来史』及び『長崎洋学史』において「向井元升と西洋医方」に一つの章を当てた古賀十二郎は利用した史料の書誌情報を示していないが[3)]，同章で明治 24 年に『日本博物学年表』を発表した植物学の先駆者白井光太郎に言及している．この本を調べると，向井元升と「紅毛流外科秘要」は，明治 41（1908）の増訂版で確認できる．残念ながら，白井も資料の所在及びその内容を明らかにしていない．

「承応三　　向井元升，和蘭訳官ト共ニ，阿蘭陀医メストロアンスヨレアンロ伝ノ医方ヲ和解

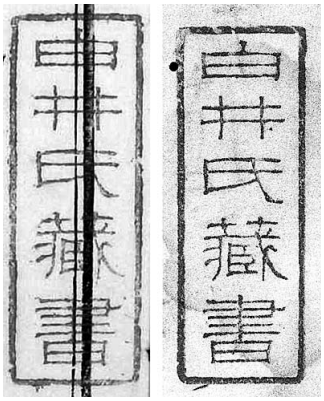

図1 白井光太郎の蔵書印
（左は早稲田大学図書館蔵『外国言付』より[7]，右は九州大学医学図書館蔵「紅毛流外科秘要」より）

シ，「紅毛流外科秘要」七巻トス[4]」

九州大学医学図書館の貴重古医書コレクションには同名の写本「紅毛流外科秘要」（7巻2冊）が保管されている[5]．『国書総目録[6]』がそれを古賀らが語ったものとは別項に収録しているが，この九大本には眼科教室の旧蔵書印とともに「白井氏蔵書」の印がある．同様な印は白井光太郎旧蔵の他の本にもあり（図1），また，九大本の第6巻の奥書として「向井玄松」と「メストロアンスヨンアンロ伝」を示す記述が確認できるので，白井光太郎が述べている「紅毛流外科秘要」はこの写本だったに違いない．

白井氏蔵書の大半は帝国図書館を経て，白井文庫として国立国会図書館本草関係コレクションの中核となった．それに含まれていない「紅毛流外科秘要」の所在を知らない歴代の研究者は，『日本博物学年表』の記述を繰り返しながら，その背景と現存の関連史料についていくつかの報告を発表している．関場不二彦は白井が所蔵していた「阿蘭陀療治書」より一連の題目を列挙し，「アンスヨレアン」，向井元升，通詞たちの名を示す奥書を簡単に紹介している[8]．岩生成一は嵐山甫庵が撰した「蕃国治方類聚」及び出島商館日誌における記述を取り上げたが，同日誌の重要な記述を見過ごしたため商館医をJan Stipetと誤認してしまった[9]．かつてなく徹底的な分析を行った小川鼎三と酒井シヅは，新資料として酒井氏が千葉県の河内家で発見した写本及び京都大学所蔵の写本を踏まえ，向井元升が接触した商館医は二人（アンスヨレアン，スティビン）いたことを指摘し，明暦3年に成立した外科書の主な項目を挙げている[10]．

2 儒医向井玄升と出島商館医との交流

向井玄升の生涯を伝える情報源として，貝原益軒が元禄7（1694）年に著した「向井氏霊蘭先生碑銘並序」は最も依拠すべき書である．先行研究が取り上げている「向井氏系譜」，「向井元仲書上覚書」，『長崎先民伝』はその後に成立したものなので，それぞれの記述を検証する必要がある．元升は9歳で父に従って出生地の酒村（肥前国神崎郡）から長崎の本興善町に移住したとされている．その直後，平戸のオランダ商館が向井家から300メートルしか離れていない出島に移転したので，若き元升は，異国の船や，それがもたらす舶来品を見たり，紅毛人と接触している商人，役人，通詞，職人の話を聞いたりしており，大いに刺激を受けたに違いない．入港する唐人の数多くのジャンク船も忘れてはならない．残念ながら，元升が受けた教育に関する手掛かりは乏しい．貝原益軒の碑銘には「独学刻苦，日夜精研」という文句もあるので，特定の学派には属さなかったようだ．『長崎先民伝』によれば，彼は寛永7（1630）年に林吉左衛門について南蛮天文学を学んだ[11]．その年から始まった医業についても，手掛かりが十分とは言えないが，並々ならぬ知的好奇心と吸収力を備えていたと思われる元升は，皇子後宮，公卿大夫や加賀の前田公の病気治療にあたり「当世の良医」と呼ばれるまでに成長していた[12]．

元升は寛永16（1639）年から書物改役として，唐船が持ち込む書物を「御文庫」（紅葉山文庫）に納める職務をつとめ，さらに，正保4（1647）年に興善町に建設された聖堂の祭酒となり，その翌年今籠町に私塾輔仁堂を置いて儒学を講じた．その数年後キリスト教及び隠元隆琦（1592–1673）が開いた黄檗宗の批判を行い，幕府から寄せられた信頼にあらためて応えた[13]．当時の宗門改役・

大目付井上筑後守政重にとって，向井元升が直轄地長崎での有望な人材だったことは容易に想像できる．大目付に仕えた者の中に，拷問の末改宗し帰化した元イエズス会士沢野忠庵（Christovão Ferreira）がいた．元升は，明暦2（1656）年に忠庵がローマ字で作成した原稿を，通詞西玄甫を介して「乾坤弁説」として写し和文に仕上げることになり，西洋天文学の受容史に残る偉大な業績を挙げた[14]．

とはいえ，儒学者及び医師として名声を得た元升が，紅毛流外科が盛んになる1650年代に自ら出島へ赴いたことは想像しがたい．千葉大学附属図書館蔵の「阿蘭陀国加須波留先生系脈」のような後世の系図の一部には元升の名が見られる[15]．彼の著作の中にはカスパル・シャムベルゲルに遡る記述は確認できないが，慶安2（1649）年に来日したこの外科医と接触した可能性は十分にある．出島商館長日誌によれば，同年11月7日には商館の阿蘭陀通詞が，「剃髪した男四名」を伴って商館長室に現われ，長崎奉行馬場三郎左衛門から，直ちに外科の授業を行うよう依頼された旨を伝えた[16]．また，1706年に死去したシャムベルゲルの葬儀のために作成された略歴も，彼が長崎に到着してから「日本人医師四人からその職業上の能力を試された」と伝えている[17]．当時の長崎の医師の面々を考えると，奉行の手厚い保護を受け，地元の医界の頂点に立った向井元升が最有力候補として浮上してくる．

長崎歴史文化博物館が所蔵する「阿蘭陀外科書」の大半の部分は，広く普及したカスパル流診断法及び腫物治療法を伝えている．最後に記された「加須波留」の名と慶安4（1651）年の日付もそれを裏付けている[18]．37丁以降の短い「紅毛膏薬秘伝書」には一連の膏薬方が列記され，シャムベルゲルと向井元升との関連が示されている．これ以外の同様な写本の存在はまだ確認できていないが，慶安2年秋の両者の出会いを契機に成立した書と考えられる．

「右二拾三方者従井上／筑後殿紅毛カスハルメステル／被仰付候醫向井玄松／立会薬味以吟味之上ロヲ／和令書写指上〆者也／年号月日」[19]
（／は改行）

シャムベルゲルらが，まもなく江戸へ出発したので，この慶安2年の接触は短期間で終わってしまった．その後，江戸での滞在中，むしろ大目付井上筑後守政重とシャムベルゲルとの緊密な交流が注目されるようになった．徳川体制の安定化のために，西洋の有用な科学技術の移転に取り組んでいた井上には，紅毛人の医学に目を向ける戦略的な理由と同時に個人的動機もあった[20]．侍医藤作[21]及び通詞たちに関する記述から，彼は痔，膀胱結石及びカタルを患っていたことが分かる[22]．幕末まで二度となかった10ヶ月という異例の長さにわたるシャムベルゲルの治療活動は，大目付，老中などの間で西洋外科術に対する強い関心を呼び起こしたが，その後，参府する歴代の商館医たちの江戸滞在期間が短く，同行の通詞は商館長による拝謁などの準備に忙殺されたので，井上は明暦2（1656）年の春，参府中の商館長ブシェリヨン（Jan Bouchelion）に治療術及び薬に関する覚え書きを渡し，一行が長崎へ帰ってから，長崎奉行黒川与兵衛を通じて向井元升を商館長及び外科医に紹介させた[23]．

医学の教授を求められていた上位外科医は明暦2年の江戸参府ですでに手腕を発揮していたドイツ・ブレスラウ出身のハンス・ユリアン・ハンケ（Hans Juriaen Hancke）だった[24]．彼は30年戦争中に成長期を過ごし，豊富な経験を蓄積していたと思われる．ハンケは2月5日に江戸に到着して間もなく井上筑後守の依頼を受け，膀胱結石に効く薬など様々な軟薬と膏薬について説明しなければならなかった[25]．その後，ハンケは井上の紹介で土佐藩の第二代藩主山内忠義など数名の患者の治療にあたり[26]，井上邸で納品された鉄製の義手と義足やビリリ，スランゲンステーン，各種薬品を説明したり，アンドレアス・ヴェサリウスの解剖書の解説をしたりしていた[27]．ハンケは高い評価と報酬を受けたが，出島商館長ブシェリオンによる後任者ワーゲネル宛ての申し送り状には，「江戸での滞在期間は短かった」ので，大目付が「人

問が一般に患う様々な病気の治療法及び薬の製造に関する長い日本語の覚え書きを渡した」と報告されている[28]．

長崎に帰ってからの1656年5月6日に，長崎奉行の元には井上筑後守の書状が届いた．これには長崎在住の「向井元升という身分の高い日本人医師」（voornamen Japansen doctoor genaemt Moccay Ginsjo）に，オランダ人に渡した覚書を基に「医学と薬品の調合法を伝授」するよう記されていた[29]．その後の向井元升とハンケの接触については拙論ですでに詳細に報告した[30]．5月8日に出島町年寄臨席のもと，通詞が様々な膏薬の処方を記録し始めたが，間もなく皆はこの仕事の意味に疑問を抱くようになったと商館日誌に記されている．全てを詳細に記録したとしても，これらの膏薬や軟膏は，様々な薬品や薬草がないために日本では調剤ができなかった．それでも大目付井上を満足させるために作業は続けられた．彼がある薬品を必要とした場合には，それらを調合することになっていた[31]．紅毛流外科の受容環境を物語るこの記述は大いに注目に値する．また，様々な説明を問い返したり，確認したりする翻訳は多大な時間がかかり，骨の折れる作業だった．商館長によれば，元升が出島蘭館を訪ねるたび通詞全員が，翻訳に携わらなければならなかった[32]．8月末にこの作業は終了したが，同年の12月と1657年1月に向井元升が出島を訪れハンケとともに長崎市内の薬屋（droguiste-winckeltjes）の医薬品の調査を行った[33]．11月に就任したドイツ人商館長ワーゲネル（Zacharias Wagener）が前任者ブヘリヨンから渡された申し送り状は，本来の職務を超えたこの活動の重要性を強調している．最初は帰国を考えていたハンケをもう一度江戸参府に随行させるため，新旧両商館長は彼の月給を32ギルダーから42ギルダーに上げることを決定した[34]．

江戸への出発も間近に迫った1657年1月14日，向井元升が執筆した文書は商館長ワーゲネルの日誌に現れる．

「日曜日，昼食をすませるとしばらくして奉行のもとから，通詞全員と，これまで何度も触れた日本人医師が遣わされ，ヨーロッパ流の治療術に関する二冊の書物について語った．これらの書物は，この医師が大目付筑後殿の命を受け，我々の上位外科医が誠実にまたよい文体で語ったものを，通詞の助けを得て翻訳したものだ．これから奉行の名においてこの書物を江戸へ持参し，大目付に渡す所存であるという．しかしまず外科医が署名し，さらには私自らも署名して，外科医が上述の医師にさまざまな著作を基に教授したことには全く間違いがなく，最高の知識をもって行われたものであることを保証しなければならなかった．私自身は異様でばかげた理由づけだと思い，断りたかったが，逆らう余地はほとんどなく，奉行の要求に従わざるを得なかった[35]．」

数日後奉行は，商館長にこの2冊の医学書の封印がしてあった1冊を持たせてよこし，「皇帝」への献上品となるものなので，筑後殿に渡すようにという指示を出した[36]．しかし，その春の「明暦の大火」によりオランダ人が泊まっていた長崎屋とともにすべての持参品が灰になってしまった．かろうじて生き延びた商館長一行が長崎出島へ戻って2週間後奉行はあらためて医学に関する文書の作成を打診したが，ハンケの医書はすべて焼失したので，この計画は延期された．ワーゲネルによれば通詞たちは，顔を見合わせて「手間のかかる，辛い，やっかいな仕事から解放された」ことを喜んでいた[37]．

同年の10月27日，オランダ・スキダム（Schiedam）出身の上位外科医ステフェン・デ・ラ・トンブ（Steven/Stephanus de la Tombe）が就任した．間もなく江戸へ旅立つ奉行甲斐庄喜右衛門の指示により，元升は再び医療と医薬品に関する文書の作成を開始していた[38]．商館日誌によれば，この作業は11月6日から約3週間にわたり毎日行われた[39]．26日に，「元升博士」（doctoor Ginsjouw）は内容を整理してから，書物を奉行へ送ると説明したが，12月17日，彼はもう一度外科医と一緒に長崎の「小庭」において自分がまだ知らないいくつかの薬草を探しに出かけた[40]．こ

れは，出島商館日誌における向井元升に関する最後の記述である．その約1年後の万治元年11月，彼は一家をあげて京都で医師として開業することになった．岩生成一及び小川・酒井が述べている「スティビン」の名を示す写本はデ・ラ・トンブに遡るものに違いない．

3　向井玄升がまとめた医書について

上記の経過を見ると，外科医ハンス・ユリアンとの出会いの「産物」として明暦3（1657）年春に奉行に提出したものに加えて，同年の秋頃に改訂，拡充されたもの，並びにその後外科医「スティビン」から教わった医方を反映する文書を想定しなければならないことがわかる．後者が前者の改訂版だったのかあるいは全く新しい報告として提出されたのかは不明である．また，当時通訳を務めた通詞たちが，これらの文書の写しを作成したことは容易に想像できる．この事を念頭にこれまで報告された写本及び新たに発見した資料を検証しながら，1652・53年の文書の姿を検討してみる．

3.1　出島商館長ワーゲネル及び外科医の署名を示す「阿蘭陀伝外科類方」

筆者がすでに1996年に詳細に紹介したこの写本は「エンパラストノ類」（「硬膏薬」，5品），「エンクエンテノ類」（軟薬，6品），「ヲウリヨノ類」（油薬，9品），「フロウリスノ類　付タリ色々ノ薬味」（薬草とその他の薬品，17品）の四つの部に分けられている[41]．

巻末に西洋で珍重されていた解毒剤「テリヤアカ」（Theriaca）の効能を細かく列挙した後にこう記されている．

「此テリヤアカ調合ノ事ハ日本ニテナリガキ薬方也阿蘭陀国ニテモ外科ハ調合スル事ナシ薬屋ニ調合スル薬也／明暦二年ノ年阿蘭陀外科ハ右ノ旨ヲ述テ薬方ヲ伝ヘズ同三年ノ年ノ外科伝之別書ニ此薬方注ス者也」

この万能薬に必要な成分はヨーロッパ人外科医の通常の備えを遙かに超える64品に及び，調合

図2　「阿蘭陀伝外科類方」に見られる「フロウリス」（花類生薬）の記述例

後1年以上発酵させるものもあるので，この高価な薬品の製造は薬局に任されていた．

「阿蘭陀伝外科類方」は，その他の写本に見られない奥書で終わっている．

「兩御奉行様被　仰付ヲ以阿蘭陀国之名医共之医書ヲ以書顕申候／メステレアンス　　在判／右外科薬方口伝之通送仁念ヲ入サセ申候／カビタン　　サカリヤスハアケナル　　在判」[42]

この記述は，1657年1月14日の出島商館日誌が伝えている商館長ワーゲネル及び外科医ハンスによる署名を示しており，17世紀におけるオランダ側の資料と日本側の資料が内容的に一致している稀な事例となっている．残念ながら，現存するのは「巻之上」のみで，同様の書名を持つ下巻は見つかっていない．

3.2　新発見の「阿蘭陀外科医方」

筆者が入手したこの写本は2巻から構成されており，膏薬，軟薬，油薬，花ノ類，根之類，土石之類，テリヤカを紹介する上巻の内容は「阿蘭陀伝外科類方」（巻之上）と一致している．下巻は金瘡の痛み止め，血止，内癰などの腫物から便秘，難産，耳鳴りにいたる各種療治法を記しており，巻末に以下の記述がある[43]．

「右阿蘭陀傳之醫書上下巻阿蘭陀外科メステルアンスヨレアンロ傳之通以吟味向井玄松立合和ヶ申候右通事中奇合和之通慥承申候／明暦三乙酉歳／十月　日　　向井玄松［判形有］／馬田九郎左衛門／志築孫兵衛／名村八左右衛門／石橋助左右衛門／西　吉兵衛／横山與三右衛門／馬田七兵衛／富永仁兵衛」

この奥書の日付は，向井元升があらためて出島で3週間にわたり説明を受けた1657年の11月に相当する．従って，明暦3年末に編集された二つめの文書は同年の春に江戸に送られた最初の報告の改訂版だった可能性が高い．少なくとも上巻に見られる医薬品の記述はそのままで再利用された．

また，「阿蘭陀外科医方」は，出島商館長が1657年1月4・5日及び同年12月17日付で日誌に残している向井元升と商館医が共同で長崎の薬屋で行った薬種調査を示す唯一の写本である．

「長崎町薬屋江阿蘭陀外科并玄松通事共参吟味仕知申候薬種事

一 フルウトステン	代赭石
一 ヘニグリ	小茴香
一 ラテイシサアト	ロフシ
一 カルノウテ	モツシヨクシ
一 クウヘイフン	ヒツトウカ
一 アイフトベイジン	フクボンシ
一 シキイテネイテ	ヒマシ
一 ラカヘイフル	ヒハツ
一 ミラフラアネ	カシ
一 セイフルンフラアト	蓮葉
一 セイモンフルンタアコ	車前子
一 カルタアモン	縮砂
一 サンゴヘイシダラアゴニス	血碣
一 ホウヘイシ	石ワタ
一 セイモンリイニ	麻仁
一 メステルヲルト	カウホン
一 ロウ〳〵サアト	ニラノミ
一 ケライニケレツセン	蒼茸
一 フロウメンテ	荊芥
一 ヲルテサフラン	紅花
一 カルナアテカツフル	石当皮
一 メニイ	丹
一 アサヘイテタ	アギ
一 ケレスクタアロムソウト	セイエン
一 ステイラアクスイクエテイ	蘇香油
一 カウアネヲウゴ	マチン
一 コロウトケレヲセンサアト	牛房子
一 ヘイトロヘイシ	ヤウキセキ
一 セイハアル	海馬
一 ムウルヘイシユ	桑椹子
一 ホウロウス	ホウシヤ
一 セイモンカナツス	アサノミ
一 アヒヨン	アヒン
一 アヽルヘイ	ロクハイ

右之分知ヾ申候」

興味深いことに，「阿蘭陀外科医方」の書写者として，カスパル・シャムベルゲルの治療術を習得したのち，1650・60年の多くの商館医関連の資料を入手し，初期紅毛流外科の普及に大いに貢献した医師河口良庵春益（1629–1687）の名が記してある[44]．

3.3 「紅毛流外科秘要」とその位置づけ

「紅毛流外科秘要」を向井元升の著作として位置づけた白井光太郎は，その内容には全く触れなかった．九州大学で再発見したこの写本を調査すると，その整合性及び由来に関する疑問点が出てくる．題箋及び1丁目の内題は「紅毛流外科秘要」であるのに，第4巻と第7巻以外の巻頭の題目は「阿蘭陀外科書」となっている．

第1巻は諸腫物，「鼻茸」，脱肛，各種痛み，耳鳴り，吐血，「下血」，「痰積」，「腸之病」，淋病などの治療について述べているが，その情報源は不明である．一連の癰疽の特徴と治療を紹介している第2巻と第3巻には漢方系の概要に「紅毛曰」，「阿蘭陀曰」という言い回しで，著者が受けた伝授の内容を付け加えている．第4巻に見られる16の「腫物見立図」は「七日針イム」，「灸ヲイム」などで，漢方系の病症図を模写したものである．巻末の「切疵妙方」については長崎の唐人が伝授

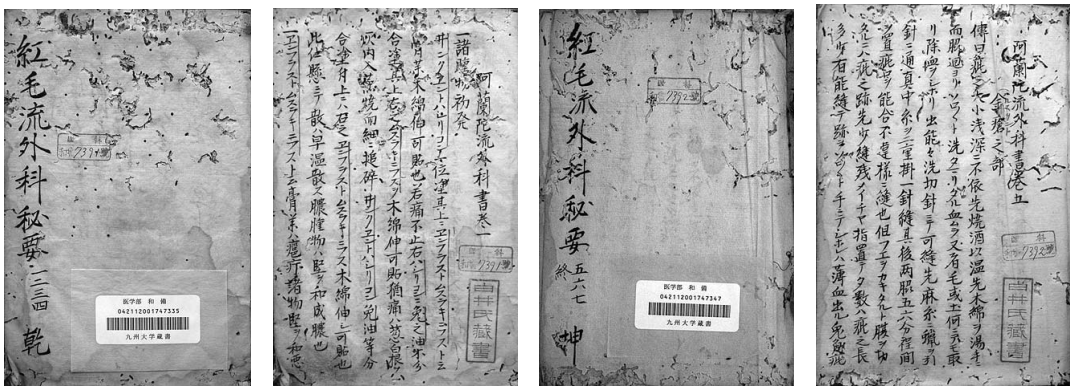

図3　「紅毛流外科秘要」

したとの説明が付いている[45]．第5巻の「金瘡之部」では，「突疵」，「切疵」，「大便結」，「小便普通」，「虫気」，「熱気」や蘭方の油薬，漢方の散薬などに関する長短の記述が混在しており，様々な記述の寄せ集めという印象を受ける．

第6巻は30種の膏薬及び二つのその他の薬方を列挙している．後書きは以下の通りである．

「右三拾色膏藥者五巻書之内之薬／症也吟味紅毛外科メストロアンスヨレアン／正傳之医書通詞志築友仙相／傳也／右終巻」

この「膏薬之部」は翻訳に参加した通詞志築孫兵衛に遡るものであろう．ここで第6巻が終わったはずであるが，3丁にわたる「外科　別伝」という題目の下で6種の膏薬方が紹介されてから，もう一つの奥書が見られる．

「右阿蘭陀傳之医書メストロアンスヨレアン口傳／之通以吟味向井玄松立合和申左之／通通詞中寄合和解無相違者也／暦三配和」

もともとここにあった通詞の名前は後世の書写者が省略した．白井光太郎が述べている「紅毛流外科秘要」の位置づけの根拠は，この奥書だと思われるが，ここまでの6巻全体が向井元升によるものかどうかは，明らかではない．さらに，最後の第7巻に進むと「十七方」という題目の下で，阿蘭陀通詞猪股伝兵衛が慶安3（1650）年に記した外科医カスパル・シャムベルゲルに由来する「熱寒風痰の見様」及びカスパル流の17種の膏薬方が掲載されている[46]．最後の説明はそのことを裏付けている．

「四先生ノ云／仲景曰外感ノ兒曰此時ニハ外科ヲ不用／河間曰　一切ノ病自火發ト云／東垣曰　一切ノ病皆内傷ヨリ発ト云／丹溪曰　一切ノ病自濕發ト云／薛立斉曰　内外ヲ用テ右ノ四先生ヲハ兼テ外科ヲ用ユ雖然／薛氏ノ書ニハ無外感右阿蘭陀外科メストロカスハル口傳／通編一冊指上ヶ申書之通詞／猪俣傳兵衛　判有」

巻末でもある次の丁に見られる記述はこの資料全体についてのものと思われる．

「[朱書] 寛延元年戊[墨書]ノ辰ノ [朱書] 五月日去ル外料／病中看病ス因之為遺物相送一子／余人江者一覧受向不可有者也／肥前於長崎／本多玄節時春／行年二十五歳／[墨書] 文政十年丁亥年迄／凡八十年ニ成ル／■■■■（ケシアト）／本田氏（朱印）」

上記の状況を総評すると，白井光太郎と大きく異なる位置づけにいたる．「紅毛流外科秘要」は向井元升に遡る記述を包含しているが，カスパル流膏薬及び西洋外科術と無関係の散薬方，「腫物見立図」などがあり，巻によりその伝達史も異なるので，白井光太郎や古賀十二郎が提唱した説には無理があると言わざるを得ない．

3.4　河内本（無題）

酒井シヅが千葉県市原市で発見したこの無題の写本は[47]，巻末に向井玄松及び通詞石橋助左衛門，名村八左衛門，志筑孫兵衛，西吉兵衛，冨永仁兵衛の名に続いて「右之外科之書被仰付候付何[茂]寄合吟味之上指上申候」とある．35丁までは，「阿蘭陀外科医方」及び「阿蘭陀伝外科類方」にも見られる「油ノ類」，「インハラストノ類」，「エングエントノ類」，「フロウリスノ類」やその他の薬品を記している．薬品の数が上記の文書と異なっているので，後世の資料が混ざっている可能性がある．また，最後にテリヤアカ及びその薬方の伝達時期が記録してある．

「明暦二年之ヲランダ外科ハ右ノ旨ヲ述テ薬方／ヲ伝ヘス同三年ノ外科伝之別書ニ此薬方ヲ注ス／ルモノ也」

その後のさらなる膏薬の背景は不明だが，50丁からの治療術は「阿蘭陀外科医方」の下巻の一部と一致している．84丁以降の「證治指南」は29種の癰疽の特徴とその治療を紹介している．通詞猪股伝兵衛がまとめたカスパル文書は，「熱濕ヨリ生ル腫物」，「寒燥ノ腫物」，「風気ヨリ生ル腫物」，「痰ヨリ生シタル腫物」など，西洋体液病理学の「熱寒風痰見様」に沿った形で各種腫物を論じており，カスパルの教えをそのままの形で伝えている[48]．それに対し，「證治指南」が述べている癰疽の背後には『霊枢』の「癰疽第八十一」に遡る漢方系の研究歴があり，それに精通していた著者はオランダ語名を所々に付け加えながら，出島商館医が語った腫物をこの伝統的な枠組みの中で整理している．陽症，陰症などの特徴を概観した上で，「阿蘭陀曰」，「紅毛曰」などの言い回しで，オランダ人から受けた説明が紹介されている．

「證治指南」の最後に，「金瘡」という題目の下で腹疵，鉄砲疵，鑓疵などの治療法及び好物，禁物について比較的簡潔に論じられている．それに続く奥書は向井元升及び通詞の名を挙げている．

「右之外科之書被仰付候／付何[茂]寄合吟味之上指上／申候／向井玄松／石橋助左衛門／名村八左衛門／志筑孫兵衛／西吉兵衛／冨永仁兵衛／横山与三右衛門／高田七兵衛」

3.5　「證治指南」系のその他の写本

膏薬や薬草を取り上げた「アンスヨレアン」に遡る記述はあまり広まらなかったようだが，癰疽に関する説明は後世の医師に受け継がれていた形跡が残っている．残念ながら『西医学東漸史話』で別個の課題の関連で自蔵の「證治指南」の附録に言及している関場不二彦は，同写本の本文を紹介していない．「證治指南」と明暦3（1657）年の外科書との関連性を初めて指摘したのは，酒井シヅと小川鼎三であった[49]．筆者も同じ印象を抱き，河内本の「證治指南」をもとに類似の資料を探すことにした．

関場が所蔵していた「證治指南」は楢林家三代目家督楢林栄哲峡山（1759–1828）[50]の門人高須清馨による自筆本として楢林家の元祖出島阿蘭陀通詞楢林鎮山と直結している．運良く筆者は行方不明だったこの貴重な写本を入手した[51]．この「證治指南」の中巻に列挙されている38品の油薬は河内本にも見られ，明暦2・3年の教授を反映し

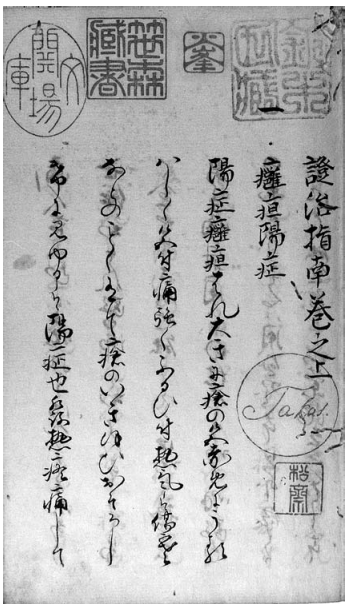

図4　高須清馨写「證治指南」

ている．下巻の23品の膏薬と軟薬の後には「てりあゝかの方」が記されている．上巻は河内本の「證治指南」と完全に一致する形で29種の癰疽を述べている．ここにも最後に腹疵，鉄砲疵などの治療法及び好物，禁物のことについての記述が見られる．また，傷口から「腸ワタ」が出た際，腸を戻すために傷口の上方に腹を2，3寸見合わせて切る「腹小疵図」も確認できる．

九州大学附属図書館蔵の「阿蘭陀外科證治指南」は明暦3年の詳細な奥書を示す「阿蘭陀伝外科類方」と一緒に伝わった同一の書写者によるものである（図5）．この写本は癰疽のほかに諸傷の手当て及び「腹小疵之図」を示している[52]．

慶應大学蔵の「證治指南」はすでに述べた河口良庵に遡る「阿蘭陀外科正伝」に含まれており，紅毛流外科に大いに関わりがあった当時の人物に遡る資料として高い評価に値する．この写本には腹傷の図に加えて，「内癰」の条での「肺癰鍼穴図」及び「疔瘡」の条での「尺澤之図　口伝」が見られる．1650年から1660年代後半まで長崎の江戸町に住んでいた良庵は，晩年を伊予の大洲で過ごしながら，取得した知識を「外科要訣」としてまとめた．ここに，カスパル・シャムベルゲル，ヘルマヌス・カツ（Hermanus Katz）に由来する記述とともに癰疽と疔瘡の治療がある．所々追加の説明が見られるが，向井元升が伝えた底本の姿は容易に確認できる[53]．

関場不二彦がその奥書を理由に「アンスヨレアン」と「向井玄松」を関連づけているものの，彼が「缺本」と呼ぶ「阿蘭陀療治書」の所在は残念ながら不明である[54]．

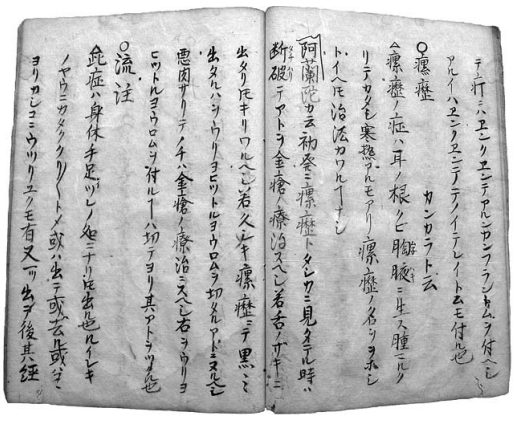

図5　瘰癧に関する記述（「阿蘭陀外科證治指南」より）

「阿蘭陀療治書」という写本はもう一つ，九州大学の附属図書館にあるが，関場が引用している奥書は見られない．いずれにしても，この「阿蘭陀療治書」の上巻は河内本などの「證治指南」の29種の癰疽のうちの22種を記しているが，その順番と文章はかなり入れ変えられており，後世の写本の「歪曲」された一例と言える．

興味深いことに関場不二彦は初期蘭方医として活躍していた吉永升庵・升雪父子を論じる際，「證治指南」と内容的に酷似する「阿蘭陀外科正伝」を「軍陣外科」の先駆的な資料として取り上げている．京都大学の富士川文庫で保管されているこの写本は第1巻と第2巻で河内本などと同様に癰疽陽症，癰疽陰症をはじめ多くの癰疽を取り上げている．漢方系の略説のあとはオランダ人の説明が紹介されているが，その内容は上記の「證治指南」とは異なるものである．また，「阿蘭陀曰」という言い回しと並んで「阿留麻奴須ノ曰く」という記述も確認できるので，万治3（1660）年から2年間出島で勤務していたヘルマヌス・カツがハンス・ユリアン・ハンケとステフェン・デ・ラ・トンブに引き続いて外科術の教授を行ったことがわかる．升庵・升雪父子は向井元升の文書をもとに蘭館医から独自の情報を得たようだ．

白井光太郎や古賀十二郎が向井元升の書物であると提唱した「紅毛流外科秘要」に見られる「證治指南」は四つの癰疽しか示しておらず，その他の癰疽の順番は大きく乱れているので，本来の形とはかなり異なっていると言わざるを得ない．

「證治指南」系のほとんどの文書は癰疽の特徴と治療を述べた上で金瘡のいくつかの治療法を取り上げているが，癰疽はこの文書の最重要課題である．

記述の内容と形式まで一致する写本あるいはほぼ一致している写本（○），または部分的に同様な内容を示し間違いなく「證治指南」の強い影響を受けた文書及び版本（△）として以下のものが確認できた[55]．

資料名（所在）	癰疽	金瘡	腹小疵図	肺癰鍼穴図
河内本（千葉県河内家蔵）	○	○	○	
「證治指南」（高須自筆本，筆者蔵）	○	○	○	
「證治指南」（「阿蘭陀外科正伝」上巻）（東洋文庫）	○		○	
「阿蘭陀外科證治指南」（九大）	○	○	○	
「證治指南」（「阿蘭陀外療集」巻一）（慶応大）	○	○	○	○
「紅毛外科経験秘方」（慶応大）	○	○	○	○
「紅毛流外科秘要」巻二・三（九大）	△			○
「阿蘭陀外科正伝」（京大）	△			
「阿蘭陀療治書」（九大）	△			
「紅毛外科療治書」（九大）	○			
「外科要訣」（古河歴博）	○	○		
『阿蘭陀外科良方』（巻一・二・三）	○	○	○	

高須自筆本が示すように，この書物の転写は19世紀まで続いていた．地方への普及も確認できる．書写者の移住により「外科要訣」は伊予大洲で成立しており，各地からの長崎遊学の事例も少なくない．豊後中津城から約17キロ離れた屋形谷に，18世紀から医業を営む屋形家があった．ツンベリが来日した安永5（1776）年，当時の家督屋形諸文は，著名な通詞蘭学者吉雄耕牛の「学室」で「金瘡跌撲療治伝」，「證治指南」など数々の初期紅毛流写本を写し持ち帰った[56]．欠落，追加，改変は多いが，癰疽に関する記述が向井元升の文章に基づいていることは一目瞭然である．

3.6 『阿蘭陀外科良方』による紅毛流外科のさらなる普及

洋学史研究の草分け沼田次郎は，1966年の時点で紅毛流外科の独自性とその水準をあまり評価していなかった[58]．その後，阿蘭陀通詞による業績や出島蘭館医の活動に関する様々な資料が発見・分析されたので，彼はそれについて1989年の改訂版で紹介したが，18世紀の蘭学との違いを強調するために，17世紀に日本に伝わった知識は特権階級のためのものに過ぎず，その範囲を超えて一般に伝わり普及した事はなかったと結論づけている．

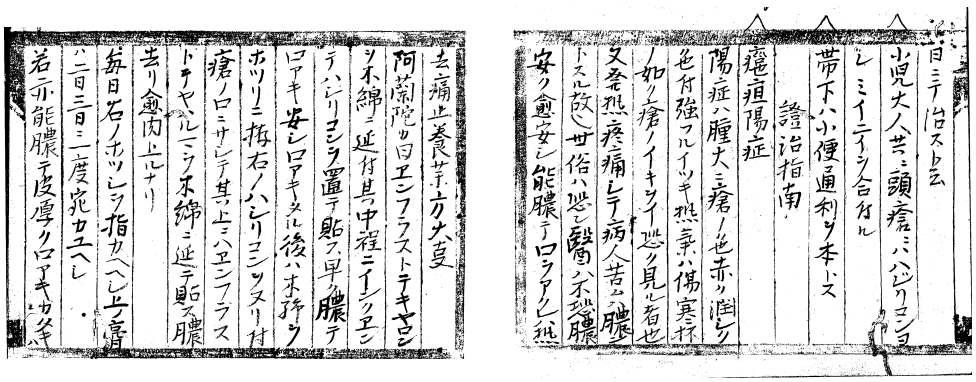

図6 村医屋形諸文が安永5（1776）年に吉雄耕牛塾で写した「證治指南」[57]

「以上，鎖国直後から主として十七世紀における西欧文化の伝来とその受容のあらましをオランダ語学と医学・砲術の分野について概観した．その他にも例えば数学とか星学の知識とか若干オランダ人によって伝えられたこともあるが，格別の成果を残していない．そして特徴的なことは，これらの砲術と言い医学と言い，幕府当局の独占ないし為政者階級の掌中に握られていた，ということである．…（中略）…医学の場合にも紅毛流の諸氏を幕医として遂次登用していることは前記の通りである．また前述したいくつかの例から見ても，通詞の医学を学んだ者以外の例はみなおそらくはその知育の諸藩主の派遣する所であったことは推察に難くない．そうだとすれば，その伝授された医学がそれら特権階級のためのものであって一般のためのものではなかったこともほぼ明らかであるし，従ってそれが一般に公開されることなくその家の秘伝として伝来されたことも当然であろう．…（中略）…幕医として登用された紅毛流の諸家はもちろん幕府のための医師であって一般のための医師ではなかった．諸侯が長崎に派遣した諸氏もまた彼らのための医師で一般のための医師ではなかった．従って彼ら医師がその習得した医学を墨守してそのためそれが一般に伝わり普及することがなかったのも当然である[59]．」

しかし，当時の実情はどうだったであろう．権力者の侍医ではない河口良庵のような医師も，すでにシャムベルゲル，ハンケなどに遡る写本を入手していた．長崎から京都，そして大洲へと居を移した良庵の例が示しているように，たとえ師が得た医術を一番身近な弟子だけに伝えたとしても，その知識が20年ほどの短期間で広範囲に流布することは，十分あり得ることである[60]．

さらに，初期紅毛流外科が発達していた17世紀後半，早くも関連の本が刊行され，オランダ商館医の知識の多くは流派と師弟の範囲も超えて一般に広まった．『蔵志』，『解屍編』，『解体新書』など19世紀後半の解剖書が社会に与えた影響にはとうてい及ばないが，寛文年間以降印刷された紅毛流医書が国内各地の医師にこの新医療術の存在を認識させ，蘭方医学という分野の定着と拡充を推進した．

京都の人とされている山脇道円（名は重顯，字は士晦）の生涯は不明である．彼が寛文9（1669）年に，東麓破衲の『下学集』の増補版を出したこと及び延宝7（1679）年に宋楊斎賢集註『分類補注李太白詩』を校点し発表したことを見ると，本業は医者だったかどうかという疑問を覚える．『増補下学集』が印刷された年に，道円は『阿蘭陀流外科良方』の序文をまとめた．その翌年に開板された書物の外題と内題は異なっている．

山脇道円『阿蘭陀外科良方』洛下，中野次良右衞門，寛文十戊暦初春．（内題：『阿蘭陀流外科書』）[61]

書名の「阿蘭陀」を偽装と見なした海老沢有道は，この本を「明らかに南蛮流忠庵系である」と位置づけているが[62]，その内容を調べると，この見方に疑問を抱かざるを得ない．

巻之一冒頭にすでにその情報源が示されている．

「證治指南ニ曰．癰疽之陽症者．腫大テ瘡ノ色赤シテ二．ウルハシク色ヅキ。痛ツヨク。寒ケダチ。熱気傷寒ノゴトク有テ。瘡ノイキホヒオソロシゲニ身ユルハ。陽症也。発熱疼痛シテ。病人クルシムハ。瘡ノウマントスルユヘナリ．世俗ハオソレ。医者ハオソレズ。ウミヤスク愈ヤスキユヘナリ。ヨクウミテ口アキ。熱サメ痛止ムナリ

阿蘭陀曰。エンハラストテアキロンヲツケテ。其中ホドニハシリコン前熱気ツヨク。痛甚シクハ。其ニ内薬ヲ不可用。熱気ツヨク痛モ甚シクハ。ウミヤスシ。ウマントテノ事也。何ノ所ニ出タル癰ニモ右ノ治法也」[63]

第2巻及び第3巻も「證治指南」の記述を伝えている．癰疽の並び順と総数は河内本など信憑性の高い写本とは異なっているが，それぞれの内容は同様なものである．

3.7 外科医「ステイビン」に遡る文書

すでに述べたように，向井元升は1657年11月に就任したハンケの後任者ステフェン（Steven de la Tombe）からも同月27日から翌月17日にかけて医術の教授を受けた．その目的は，短期間で新しいことを学ぶというより，これまで作成した原稿の確認と拡充だったと思われる．明暦3年10月の日付（西暦の1656年11月）を示す「阿蘭陀外科医方」はこの時期の成立であるが，「アンスヨレアン」の名しか挙げられていない．デ・ラ・トンブの存在を示す和文資料として，小川・酒井は嵐山甫筑が「善生室医話」に収録した「ステイビン的伝之書」，「ステイビン伝療治指南並薬方記」及び「ステイビン伝金瘡療法秘蜜」，または，富士川文庫の「ステイビン外科秘伝書」を挙げ，それらの内容が明暦3年の医書と一致していることを指摘している[64]．13丁しかない後者の写本は短期間で執筆できる分量だが，書物の由来を示すのはその題目「外科秘伝書　阿蘭陀ステイビン伝来」のみである[65]．

それに対し，嘉永3（1850）年に桂川甫賢の姻戚にあたる鹿倉格善（恭卿）が写した「善生室医話」[66]は桂川家の始祖桂川甫筑（1661–1747）に直結している．商館医カツとボス（Daniel Bosch）について外科を学んだ甫筑は「ステイビン」の資料についてこう説明している．

「将ステイビント云メストルノ伝ノ可ナル所ヲ取テ書加ル也是ハ予ガ師ニテハナシ．先年向井氏自公儀迎有テ書タル内ヲ見合其頚佳ヲ抜テ此書に加」

これにより「ステイビン」は向井元升が交流していたステフェン・デ・ラ・トンブだということが裏付けられている．中乾巻に収録されている「ステイビン伝療治指南並薬方記」は上記の「證治指南」などにもある癰疽陽症，癰疽陰症に，「證治指南」の数多くの癰疽から七つの癰疽が記載されている．甫筑はそれに「打疵ノ事」，「洛身ノ事」，「溺水」にカツによる治療法を追加し，最後にこう説明している．

「右是マテハ黒川氏ノ依仰馬田九郎左衛門ト予二人ニテ師匠ハルマンスカアツ的伝ノ書ナリ前後ハステイビントテ予カ氏ニテハナシ是ハ甲斐庄氏依仰向井元升書テ奉行所ニ有之ヲ写置然故ニ不慥薬名幾ハ薬方ナトニ違有也」

引き続き，「阿蘭陀外科ステイビン的伝之書」の題目の下で，アンス・ヨレアン系とは異なる形で，18種の膏薬（「エンハラスト」）と軟薬（「イクエント」）及び「テリヤアカ」の方を列挙している．

「善生室医話」中坤の巻には「ステイビン伝金瘡療法秘蜜」という資料がある．これは腹の傷から腸が出た際などの治療法，金瘡の内薬，好物，禁物など上記の「證治指南」の金瘡部に酷似している内容であるが，どこまで続くかは確認できないので，その規模には多少の疑問の余地が残る．

「ステイビン」に遡るこれまでの資料を総合すれば，向井元升がまとめた報告の原型がある程度見えてくる．明暦3年，商館長ワーゲネルが江戸へ持参したものは，「阿蘭陀伝外科類方」の主な記述と「證治指南」の癰疽部を組み合わせた書物だったようだ．しかし，この時点では万能薬テリアカの詳細及び「證治指南」の金瘡部はまだ伝わらなかった．

4 向井元升による解釈の特徴

17世紀中頃，西洋医学に目を向ける日本人は，様々な障害を乗り越えなければならなかった．10ヶ月間にわたり江戸で外科医カスパルの説明を通訳しながら，史上初の紅毛流文書をまとめた通詞猪俣伝兵衛は相当なポルトガル語力を持っていたようだが，医学に関しては全くの素人だった．彼は，カスパルの治療を受けた大目付，老中及び大名の侍医たちと病気について話し合うことはできたかも知れないが，病理学の術語，薬品名などについてほとんど解釈せずにその発音を仮名表記でしか伝えられなかった．1650年代の出島商館長日誌で容易に確認できるように，外科医による説明をより正確に把握することや医薬品の同定は，極めて重要な課題だった．もちろん西洋医

学に関心を寄せる大名の侍医は江戸へ赴くカスパルの後任者たちにも声をかけ，情報収集を継続していたが，商館長一行の短期滞在中，様々な公務に追われていた阿蘭陀通詞は，このような対話に必要な時間を確保できなかった．優秀な医師が時間をかけて出島のオランダ商館で教授を受けることは，最も効果的な対策だった．また，二名の通詞しかいなかった江戸と違い，長崎では，通詞全員の智恵が借りられるし，医書，医薬品，医療道具なども利用できるので，学習環境として商館医の家屋は最適だった．

向井元升がまとめた文書は，通詞猪俣伝兵衛に遡るカスパル流文書と多くの点において異なっている．カスパルは膏薬方の紹介をアムステルダム薬局方のみに頼っていた．社内の基準となったこの薬局方から選別された六品の膏薬と軟薬（Emplastrum de Ranis, Emplastrum de Meliloto, Emplastrum Mucilaginibus, Emplastrum Oxycroceum, Unguentum Popoleum, Unguentum Album Ca(m)-phuratum）は，向井元升の文書に遡る「阿蘭陀伝外科類方」，「阿蘭陀外科医方」にも見られる．しかし，カスパルの後任者ハンス・ユリアンは，さらにユトレヒト薬局方とハーク薬局方（Unguentum Basilicon）及びケルンの薬局方（Unguentum de Althaea, Unguentum Aegyptiacum）も利用している．また，伝兵衛が理解できなかった薬局の独特の薬衡は，向井元升系の文書で初めて正しく反映されている[67]．

万能の解毒剤 Theriaca Andromachi Senioris は 1652 年に初めて日本に入っており，江戸で注目されていた．「阿蘭陀伝外科類方」及び河内本の奥書によれば，ハンス・ユリアンは明暦 2（1656）年にその功能を紹介した．その記述は「阿蘭陀外科医方」の上巻末にも見られる．

「テリヤカ能之事　　第一毒消　毒虫毒獣ニ喰タル時付テ吉／気ヲ強スル　身内痛ニ用テ良物覚ヲ強ス脾胃／肺ヲ補　頭痛ニモ用癰疾ニモ用肉ヲ養／身ヲ強ル藥也右何モ用テ吉此テリヤカ調合／ノ儀阿蘭陀外科モ調合不仕本國ニテ／藥屋ニ調合仕ル也」[68]

翌年にようやく別の医書に基づいて伝わった成分の説明は，後に改訂された「證治指南」の一部が示している[69]．

金瘡の関連で，カスパル流文書に見られない腹部の傷に関する記述は注目に値する．とりわけ「腹小疵図」は後世の多くの文書にも確認できる（図 7）．細い疵から「ハラワタ」が出た際，それを温かい牛乳やお湯で濡らし，「疵口ノ上ノ方タテサマニ一寸モ見合ニ切アケテハラワタ」を戻してからこの縦の疵を縫う．ゲルスドルフの『外科術の野戦手引き』など 16 世紀の外科書に見られるこの処置は，古代ローマの学者アウルス・コルネリウス・ケルスス（Aulus Cornelius Celsus）に遡る歴史の古いものである[70]．

膿（痰）の吐出を伴う肺癰には内薬が最適だが，治らない場合は，外科処置が必要となる．

「肺癰ニ用薬ニテ不癒時ニ癰之有方ノアハラ骨之内背脊骨之ハツレヨリカソエテ四ツ目之ハツレヲ押テ痛処ニ有其処ニ針刺膿可抜」[71]

鍼を刺すべき場所を示す「肺癰鍼穴図」は，数編の写本に見られる（図 8）．異人の姿を描いた場合もあり，漢方医書の影響を受けた描き方もある．

紅毛流医術の祖であるカスパルは，瀉血について語らなかったようだが，「證治指南」には，日本初の瀉血事例が掲載されている．「腎の疔」について「阿蘭陀」はその危険性を強調した上で次の治療を推薦している．

「フウルセイナ　イタリアノ国ニアル木ノ葉ノ事也．
右酒に入火ニテアタヽメ出シ白ザタウヲ少入テ用ヘシ．若シ下戸ナラハ水ニテアタヽメ出シテ白ザタウヲ少入テ用ル．一日ニ一両度用ヘシ．二日目ノ晩ニテリヤアカ少用．三日目ニ手ノ尺澤穴ヨリ血ヲ茶碗一ツ程トルヘシ．是ニテイユル也．」[72]

確かに，中国医学には「刺絡」という悪血を抜く治療法があるが，経穴の尺沢で茶碗一杯分の血

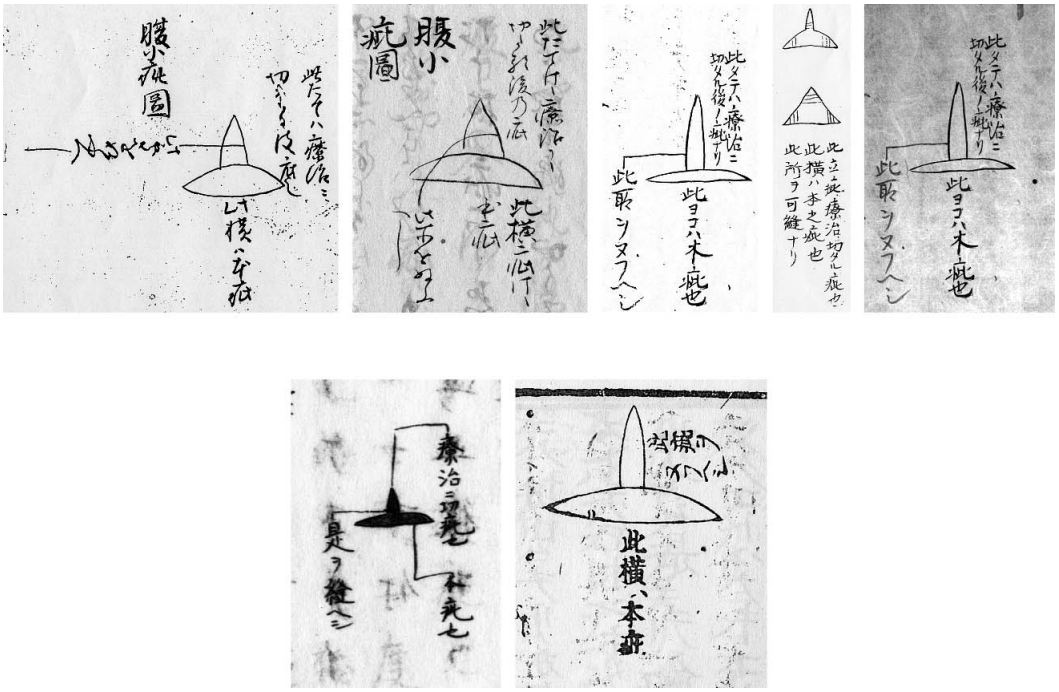

図7 「腹小疵図」

左から，河口本，「證治指南」（高須清馨写），「阿蘭陀伝外科類方」，「紅毛外科経験秘方」，「阿蘭陀外科證治指南」，「阿蘭陀外療集（一）」，『阿蘭陀外科良方』

図8 「肺癰鍼穴図」

左から　河口本，「紅毛流外科秘方」（二），「紅毛外科経験秘方」，「阿蘭陀口」，「阿蘭陀外療集」（一）

を取るのは，それを量的に遙かに超えている．ここで，向井元升は商館医ハンス・ユリアンが説明した静脈を手の太陰肺経と勘違いしたに違いない．彼はコメントをつけていないが，後世の写者による「紅毛流外科秘要」では，以下の追加が見られる．

「但日本人ハ灸治可良」[73]

また，尺沢は漢方系の医書で容易に確認できるにもかかわらず，「阿蘭陀外科正伝」や「阿蘭陀外療集」はその図を示している．それも上記の記述に対する不安，疑問のためであろう（図9）．

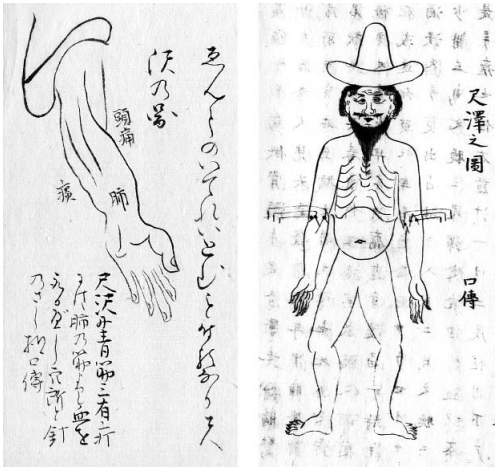

図9　左から「阿蘭陀外科正伝」（「證治指南」高須清馨写），「阿蘭陀外療集」（一）

西洋医学の伝達史上における向井元升の最も注目すべき試みは，癰疽の扱い方にある．1650年に通詞猪股伝兵衛は，外科医カスパルの説明をほぼそのままでしか伝えられなかった．仮名表記のラテン語とポルトガル語の用語だらけの見知らぬ体液病理論とそれに基づく個々の腫物の診断方法（「熱寒風痰見様」）の理解は，日本人医師にとって困難を極めた．権力ある地位にあった患者たちの強い要望がなかったら，この初の紅毛流の報告は普及しなかったであろう．

通詞猪股伝兵衛と違って医者だった向井元升は，専門家として紅毛人の教授を検証できる立場だった．彼は，中国医学に背を向ける必要を一切感じていなかった．当時の医書を見ると，その立場は容易に理解できる．明の医師陳実功が万歴45（1617）年に出版した『外科正宗』は，その病理学を総括した上で，各種癰疽の個別「論」，「看法」，「治法」，「治験」及び「主治方」を詳細に述べ，主なものの「図形」も付している．体系的で十分に発達したこのような瘍科との競争は，18世紀になっても容易ではなかった．たとえ通訳の問題を別としても，ギルド出身の外科医が伝えられる病理学に関する情報は量の面でも質の面でも限られており，医学の主流でない外科術から本道を変えるほどの影響力は発揮できなかった．上記の『外科正宗』が同世紀末まで梓行されたことは偶然ではない．17世紀中頃に出島商館医が提供できるのは新しい医薬品と医療方法ぐらいだった．

向井元升の報告はすでにその表題「證治指南」で上記の立場を示している．巻頭に陰陽虚実の基本（「癰疽陽症」，「癰疽陰症」）を記してから，元升は各癰疽の特徴を概観した上で紅毛人の発言を付け加えている．

「石榴疽　　アルトロウマ
石榴疽ノ症ハ臂ノトカリノ一寸程上ニ生スル物也初ハアワツブノヤウナル物一ツ出テ根ハ大キニシテ色赤ク高シ石ノヤウニシテ後ニハ皮ヤフレテ赤多ザクロ皮ヲムキタル如クツブ〳〵トイクツモアリ折々汁ナガル也癒ガタキ者也
阿蘭陀カ云此初発ノ時タテサマニワリ悪血ヲ去リテ薬ヲ付ヘシエンバラストカラシヤデイヤエンバラストテヤバルマカヲ付ヘシ年久シククサリヒロガリタルハヲウリヨヒツトロヨウロムヲ付テ悪肉悪血ヲサリ右二色ノ膏薬ヲ何トモ付テ漸々ニ癒ヘシ」[74]

病症の説明は『外科正宗』の記述をよく反映している．

「石榴疽者，乃少陽相火與外濕煎搏而成，其患生在肘尖上一寸是也．初起一點黃粟小泡，根便開大，色紅堅硬，腫如複碗，皮破泛出，疊如榴子，令人寒戰，猶如重瘡．」（『外科正宗』，第四巻第四十六）

ハンケの「アルトロウマ」は，おそらくAtheroma（粉瘤腫）のことであろう．東西両方の病名の説明に多少の類似性があるが，ハンケと元升が同じ患いを語り合ったとは考えにくい．大きく異なっている病理学はそれぞれの治療法にも影響を及ぼしている．『外科正宗』は，石榴疽の治療のために湯薬，丸薬や散薬，つまり内薬を薦めているが，ハンケは膏薬（Emplastrum Gratia Dei, Emplastrum Diapalma）及び胆礬油（Oleum Vitrioli）という外薬を用いている．

おわりに

用語の和訳や説明の少ない初期カスパル流文書には，異質性の強い記述が多く，その理解は困難を極めたに違いない．それに対し，大目付の依頼を受けた儒医向井元升が執筆した医書は，より実用的なものであった．疵及び各種癰疽の治療に関する記述は，出島商館医の教授に基づくものであるが，癰疽の特徴と診断については，向井は蘭方医学の説明を用いず，中国医学の教義を基盤とした．東西交流における情報の伝達が十分に成功したとは言い難いが，東洋の病理学と西洋の医術を組み合わせたこの折衷的なアプローチにより全国各地の医師たちは，それ以上の説明を受けなくても紅毛人の医術を活用できるようになった．それは，西洋医学の受容における画期的な事例である．

向井元升に遡る代表的書物とされてきた「紅毛流外科秘要」は，実際には様々な別系統の記述を含む混合物に過ぎない．これよりも蘭文史料の記述と合致する書として「阿蘭陀伝外科類方」，「阿蘭陀外科医方」などがあり，また明暦3年新春に提出された報告のほかに，同年の秋，外科医ハンス・ハンケの後任者ステフェン・デ・ラ・トンブの説明を記した，もう一点の書物が存在した．

現存の史料から判断すれば，「證治指南」はとりわけ広く流布していたようだ．寛文10（1670）年に刊行された史上初の紅毛流版本『阿蘭陀外科良方』は，第1巻から第3巻にかけて向井元升の記述を伝えているが，著者名は示されていない．「證治指南」は，身分の高い階層だけにとどまらず，早くから広く一般に普及していた．地方の奥地にいたるまでの浸透を裏付ける18世紀の事例も確認できた．蘭学が飛躍的な発展を見せる江戸後期に17世紀の文書が変わらず受け継がれていたことは，蘭学の歴史やその特徴を検証する際，大いに注目に値する．

注

1）Michel（1995a），ミヒェル（1996a），Michel（1996b），ミヒェル（1996c）
2）ミヒェル（1996d），ミヒェル（1996e）
3）古賀十二郎（1973）下巻，p. 165–167，171–173
4）白井光太郎（1908），p. 48
5）「紅毛流外科秘要」（内題は「阿蘭陀流外科書」）．写本，七巻二冊，［出版年不明］，［出版者不明］，［出版地不明］（九州大学附属図書館医学分館蔵）
6）国書総目録．（1993），第3巻，p. 307
7）『外国言付』初編，［出版年不明］，［出版者不明］，［出版地不明］（早稲田大学図書館蔵）
8）関場不二彦（1933）上巻，p. 171–173．「阿蘭陀療治書」の所在は不明．
9）岩生成一（1968），p. 160–161
10）酒井シヅ，小川鼎三（1978），p. 132–133
11）「稍長依林先生伝天文学以儒医名」．虞千里，原念斉校『長崎先民伝』［出版地不明］，文政二年刊，流寓の条より．
12）貝原益軒「向井氏霊蘭先生碑銘並序」（成田山仏教図書館蔵）
13）「知耻篇」自序，明暦元年筆（海表叢書，第一巻，東京：成山堂書店 1985；p. 1–117）
14）平岡隆二（2006），平岡隆二（2008）
15）「阿蘭陀国外科加須波留先生系脈」，写本，［書写地不明］，［書写者不明］，［書写年不明］（千葉大学附属図書館亥鼻分館所蔵）
16）NA, NFJ 63, DD 7.11.1649．オランダの国立中央文書館（Nationaal Archief,'s-Gravenhage = NA）所蔵の出島商館資料（NA 1.04.21, Nederlandse Factorij Japan）の番号は「NFJ＋番号」のように省略する．出島商館日誌（Dagregister）の資料にはさらにDDを付記する（NFJ＋番号，DD＋西暦の日付）．
17）ミヒェル（1995b）
18）「阿蘭陀外科書」写本，［書写地不明］，［書写者不明］，［書写年不明］，（長崎歴史文化博物館蔵）36丁：「此書者阿蘭陀外科／加須波留一流色雖㆓㆑為㆓秘事／累年因㆓懇望以㆓㆑超請也／不㆑貽㆓一事㆓令㆓相伝㆓畢／于時慶安四歴／正月吉日」
19）同上，41丁
20）Michel（1999），p. 113–116
21）彼の死に関する記述は出島商館日誌に残っている（NA, NFJ 69, DD: 12.11.1655）
22）NA, NFJ 67, DD: 29.1.1654, 5.2.1654 などにより
23）ミヒェル（1996c）
24）NA, NFJ 5, fol. 95v（出島商館の決議文，1656年9月27日）．筆者は以前の論文では商館長日誌に基づきHancko（ハンコ）とつづったが，出生地ヴロツワフ（ブレスラウ）での調査により，Hancke（ハンケ）が正しいと判明した．また，モンタヌスの「日本の皇帝への記念すべき使節団」の蘭語版（1669年刊）ではHanckoとなっているが，ドイツ語版（1671年刊）はHans Hanckeとつづられている．
Arnoldus Montanus: Gedenkwardige Gesantschappen der Oost-Indische Maatschappy in 't Vereenigde Nederland, aan

de Kaisaren van Japan. Amsterdam, Jacob Meurs 1669, p. 371: “Laet inschelijx d’opper-wond-heeler Hans Hanko na Iedo ’t gesantschap volgen: ende de ’gebruik der Nederlansche geneesmiddelen tegen sommige Japansche ziekten, volgens eisch van Sicungodonne.“

Arnoldus Montanus: Denckwürdige Gesandtschafften der Ost=Indischen Gesellschaft in den Vereinigten Niederländern an unterschiedliche Keyser von Japan. Amsterdam, Jacob Meurs 1671, p. 359: “Den Oberwundmeister Hansen Hancken nehmet mit euch nach Jedo; damit er des Sikungodonne befehle zur folge Unterricht geben könne wie man die Holländischen Artzneyen zu etlichen Japanischen Kranckheiten gebrauchen sol.“

25）NA, NFJ 69, DD: 8.2.1656

26）NA, NFJ 69, DD: 15.2.1656, 16.2.1656, 18.2.1656, 20.2.1656, 21.2.1656. また，NFJ 69, DD: 10.2.1656, 11.2.1656

27）NA, NFJ 69, DD: 16.2.1656. 江戸でのハンケの活動の詳細については，ミヒェル（1996a）及びミヒェル（1996c）を参照.

28）NA, NFJ 31, Berightschrift, door gem^{t} E: Boucheljon op des selfs versouk aen sijnen successeur den E: Zacharias Wagenaer, dato p^{mo} Novemb^{r} 1656, p. 155（出島商館長の送り状）

29）NA, NFJ 69, DD: 6.5.1656

30）ミヒェル（1996c）

31）NA, NFJ 69, DD: 8.5.1656

32）NA, NFJ 69, DD: 8.5.1656, 27.5.1656, 12.6.1656, 16.6.1656, 10.7.1656, 30.7.1656; NFJ 31, fol.155

33）NA, NFJ 70, DD: 12.12.1656, 4.1.1657, 5.1.1657

34）NA, NFJ 5, fol.95v: 27.11.1656（出島商館の決議文）

35）NA, NFJ 70, DD: 14.1.1657

36）NA, NFJ 70, DD: 18.1.1657: “kort naar ons gehouden middaghs mael sont den Gouverneur alle onse tolcken met seker japanse doctoor (hier vooren meermaels geciteert bij mijn), en verthoonden twee boecken in houdende beijde de geneeskonste op de Europise-wijs, die hij door ordre vanden Commissaris ’tsickingodonne van onsen opperchirurgijn redelijck wel scheen gevat ende met hulp onser tolcken overgeset te hebben, oversulcx begeerden uijt den naem van gem: Gouverneur dat deselve mede naar Jedo nemen en die aan voorn: Commissaris overleveren zoude, edoch mosten alvooren van voorsz: onse heelmeester onderteijckent, ende insgelijcx met mijn hant teijckeningh bevesticht worden, dat al wat hij d’voorsz: doctoor dienaangaende uijt diversche auteuren onderwesen en geleert hadde, alles, oprechtelijck en naar zijn beste kennis gedaen was, ende alhoewel ick zulcx voor mijn altoos een vreemde ende ongerijmde verclaringh achte, die dierhalven oock gaern afgebeden hadde, soo heefft e’t echter weijnigh mogen helpen, maar de begeerte hierin des voorsz: Gouverneurs moeten voldoen.”

37）NA, NFJ 70, DD: 20.4.1657

38）NA, NFJ 70, DD: 5.11.1657, 6.11.1657

39）NA, NFJ 70, DD: 26.11.1657

40）NA, NFJ 70, DD: 17.12.1657

41）「阿蘭陀伝外科類方」（外題「阿蘭陀外科正伝」）写本，［書写地不明］，［書写者不明］（九州大学医学部附属図書館蔵）．巻末には，「元禄八亥年八月二十八日」，「寛政二戊年十月六日　本書写之取以上五冊之内」及び「寛政十一年末年五月二十日　写之谷川ニテ木寺氏」あり．

42）「阿蘭陀伝外科類方」29 頁.

43）「阿蘭陀外科医方」，写本，上下二巻一冊，［書写地不明］，［書写者不明］，［書写年不明］（筆者蔵）．巻末に「浅澤賢春老」とある．

44）「肥陽晩孛　河口良菴春益」

45）「文化二乙巳二月長崎七年節者傳方／長崎邑秀國子伝也」

46）ミヒェル（1996e）

47）酒井シヅ（1976）

48）ミヒェル（1996d）

49）酒井シヅ，小川鼎三（1978），p. 133

50）長崎の楢林家二代栄哲高茂の養子．寛政 8 年，高茂の隠居後，佐賀藩御番方療治掛となった．文政 10 年，隠退.

51）「證治指南」，写本，上巻中巻下巻，付録天地，計 5 冊，［書写地不明］，高須清馨自筆本，松馨印有（関場不二彦旧蔵，筆者蔵）

52）「阿蘭陀外科證治指南」，写本，一巻一冊，［書写地不明］，［書写者不明］，［書写年不明］（九州大学附属図書館医学分館蔵）

53）河口良庵春益「外科要訣」，写本，七巻，大洲，自筆本，［成立年不明］（古河市歴史博物館蔵）

54）関場不二彦（1933），上巻，p. 171

55）「證治指南」写本，高須自筆本（筆者蔵）．「症治指南」（「阿蘭陀外科正伝」上巻）写本，「正徳元年五月吉辰写」（東洋文庫収蔵）．「紅毛外科経験秘方」写本，［書写地不明］，［書写者不明］，［書写年不明］（慶應大学医療情報センター，富士川文庫収蔵）．「阿蘭陀外科證治指南」写本，［書写地不明］，［書写者不明］，［書写年不明］（九州大学附属図書館医学分館蔵）．河口良庵編「症治指南」写本，「阿蘭陀外療集」（外題）「阿蘭陀外科正伝」上巻，藤山新作宛秘伝書，延享 3 年写（慶應大学医療情報センター，富士川文庫収蔵）．吉永升庵伝吉永升雲編「阿蘭陀外科正伝」写本，［書写地不明］，［書写者不明］，［書写年不明］（京都大学附属図書館，富士川文庫収蔵）．「阿蘭陀療治書」（内題：「阿蘭陀流外科之書」）写本，乾，［書写地不明］，［書写者不明］，［書写年不明］（九州大学附属図書館医学分館蔵）．山脇道円著『阿蘭陀外科良方』（内題：「阿蘭陀流外科書」）寛文 10 年刊，巻之一・二（国際日本文化研究センター，宗田文庫収蔵）．「紅毛外科

療治書」写本，［書写地不明］，［書写者不明］，安永8年写（九州大学医学部久保記念館蔵）
56）屋形家資料（中津市歴史民俗資料館蔵）
57）「雑書」，写本，一冊，長崎，安永5年，屋形諸文写（中津市歴史民俗資料館蔵）．本写本の内容は次の通りである：「証治指南」，「南蛮流外科直伝」，「万外集要小切紙目録」
58）沼田次郎（1966），p. 14–15, 22–23
59）沼田次郎（1989），p. 40–41
60）ミヒェル（1996e）
61）山脇道円『阿蘭陀外科良方』（内題は『阿蘭陀流外科書』）洛下，中野次良右衞門，寛文10年（国際日本文化研究センター，宗田文庫収蔵）
62）海老沢有道（1978），p. 504
63）『阿蘭陀外科良方』巻之一，「癰疽陽症」
64）酒井シヅ，小川鼎三（1978），p. 133
65）「外科秘伝書　阿蘭陀ステイビン伝来」，写本，［書写地不明］，［書写者不明］，［書写年不明］（京都大学附属図書館，富士川文庫収蔵）
66）嵐山甫筑篇「善生室医話」，写本，上中下乾・坤六冊，［書写地不明］，鹿倉格善写，［書写年不明］（京都大学附属図書館，富士川文庫収蔵）
67）カスパル流文書で，1オンスは10匁に換算されている．1ドラクマ＝1匁，1オンス＝10匁，1リブラ＝96匁とする「阿蘭陀伝外科類方」の換算は正しい（1 libra ＝ 12 unciae ＝ 8 drachmae）．
68）「阿蘭陀外科医方」，写本，一冊，［書写地不明］，［書写者不明］，［書写年不明］，18・19丁（筆者蔵）
69）例えば，「證治指南」高須清馨自筆本，巻之下（筆者蔵）
70）Hans von Gersdorf（1517），p. XXVIII（Von den weydwunden）
71）「紅毛流外科秘方」巻之二，6丁
72）「阿蘭陀外科證治指南」，写本，［書写地不明］，［書写者不明］，［書写年不明］（九州大学附属図書館医学分館蔵）．「阿蘭陀外療集」の第1巻にも同様な記述がある（「三日之晩ニ尺澤之穴ヨリ血ヲ茶碗一盃程取是ニテ癒也」）．
73）「紅毛流外科秘要」巻之三
74）「阿蘭陀外科證治指南」（九州大学附属図書館医学分館蔵）

参考資料

岩生成一．オランダ史料から見た江戸初期西洋医学の発達．本学士院紀要　1968；26(3): 157–173.
海老沢有道．南蛮学統の研究．（増補版）東京：創文社；1978.
古賀十二郎．西洋医術伝来史．東京：形成社；1972.
古賀十二郎．長崎洋学史．長崎：長崎文献社；1973.
国書総目録．補訂版，東京：岩波書店；1993.
酒井シヅ，小川鼎三．『解体新書』出版以前の西洋医学の受容．日本学士院紀要　1978；35(3): 129–151.
酒井シヅ．江戸時代の医家河内家の蔵書から．南総郷土文化研究史　1976；10: 4–9.
白井光太郎．日本博物学年表．増訂版．東京丸善；1908.
関場不二彦．西医学東漸史話．上巻，東京：吐鳳堂書店；1933.
沼田次郎．洋学．東京：吉川弘文館；1989.
沼田次郎．洋学伝来の歴史．東京：至文堂；1966.
平岡隆二．「乾坤弁説」諸写本の研究．長崎歴史文化博物館研究紀要 2006；1: 51–60.
平岡隆二．南蛮宇宙論におけるクラヴィウス：ゴメス『神学要綱』中の天文学的数値をめぐって．科学史研究 2008；47(246): 95–111.
ヴォルフガング・ミヒェル．日本におけるカスパル・シャムベルゲルの活動．日本医史学雑誌 1995；41(1): 3–28.（1995b）
ヴォルフガング・ミヒェル．九州大学蔵の「阿蘭陀伝外科類方」（阿蘭陀外科正伝）と向井元升について．比較社会文化研究科紀要　1996；2: 75–79.（1996a）
ヴォルフガング・ミヒェル．出島蘭館医アンス・ユリアム・ハンコについて．言語文化論究 1996；7: 83–96.（1996c）
ヴォルフガング・ミヒェル．カスパル・シャムベルゲルとカスパル流外科（Ⅰ）．日本医史学雑誌 1996；42(3): 41–65.（1996d）
ヴォルフガング・ミヒェル．カスパル・シャムベルゲルとカスパル流外科（Ⅱ）．日本医史学雑誌 1996；42(4): 21–45.（1996e）
Hans von Gersdorf. Feldtbuch der Wundartzney. 1517.
Wolfgang Michel. Hans Juriaen Hancko, Zacharias Wagener und Mukai Genshō — Aspekte einer lehrreichen Begegnung im 17. Jahrhundert. 比較社会文化研究科紀要 1995; 1: 109–114.（1995a）
Wolfgang Michel. Hans Juriaen Hancke — ein Breslauer in Japan. 独仏文学 1996; 46: 59–88.（1996b）
Wolfgang Michel. Von Leipzig nach Japan — Der Chirurg und Handelsmann Caspar Schamberger（1623–1706）München: Iudicium; 1999.

On Early Red-head-style External Medicine and the Confucian Physician Mukai Genshō

Wolfgang MICHEL

Fukuoka City

In 1656, at the request of the imperial commissioner Inoue Masashige Chikugo-no-kami, the neo-Confucian physician Mukai Genshō compiled medical instructions given to him by the Dejima trading-post surgeon Hans Juriaen Hancke. This was the first text on Western surgery by a trained Japanese specialist.

Based on an extensive analysis of related Japanese source material, it is shown that the manuscript *Komōryū geka hiyō* (“Secret compendium of red-head-style external medicine”), previously considered to represent Mukai’s original report, is a rather corrupted version. Other manuscripts, such as *Oranda-den geka ruihō* (“Arranged formulas of Dutch external medicine”), *Oranda geka ihō* (“Medical formulas of Dutch external medicine”), or *Shōji shinan* (“Compass of diagnosis and treatment”), are much more coherent in their contents and fit well with Dutch sources.

Furthermore, it is shown how Mukai “identified” and “translated” the Latin names of ulcers, tumours, inflammations, etc., by comparing Hancke’s teachings with the most comprehensive Eastern source on surgical matters, the *Waikē zhèngzōng* (Jap. *Geka seisō*, “Orthodox manual of external medicine”). His eclectic approach resulted in a combination of Sino-Japanese pathology with Western treatment methods. Mukai had set an example that would dominate the reception of Western medicine in Japan for more than a century. It became widely known as early as 1670, when Yamawaki Dōen included many parts of Mukai’s report in his *Oranda geka ryōhō* (“Good formulas of Dutch external medicine”), the first Japanese book on red-head-style external surgery.

Key words: Mukai Genshō, Hans Juriaen Hancke, Red-head-style surgery, eclectic reception, Dutch studies